練習1 スタイルの設定

下の文章に、以下のような操作を行いましょう。

1. 「藪の中」という文字に「見出し1」スタイルを適用しましょう。
2. 「検非違使に問われたる木樵りの物語」という文字の書式を好きに変更し「見出し2」スタイルに設定しましょう。
3. 他の見出し「検非違使に問われたる旅法師の物語」「検非違使に問われたる放免の物語」「検非違使に問われたる媼の物語」……のような部分にそれぞれ「見出し2」スタイルを適用しましょう。
4. 「見出し」系スタイルを設定した部分に章番号が追加されるようにしましょう。
5. 各ページのフッター部分の好きな位置にページ番号を挿入しましょう。
6. 「芥川龍之介」という文字の下に「目次」を挿入しましょう。

藪の中

芥川龍之介

検非違使に問われたる木樵りの物語

さようでございます。あの死骸を見つけたのは、わたしに違いございません。わたしは今朝いつもの通り、裏山の杉を伐りに参りました。すると山陰の藪の中に、あの死骸があったのでございます。あった処でございますか？　それは山科の駅路からは、四五町ほど隔たって居りましょう。竹の中に痩せ杉の交った、人気のない所でございます。

死骸は縹の水干に、都風のさび烏帽子をかぶったまま、仰向けに倒れて居りました。何しろ一刀とは申すものの、胸もとの突き傷でございますから、死骸のまわりの竹の落葉は、蘇芳に滲みたようでございます。いえ、血はもう流れては居りません。傷口も乾いて居ったようでございます。おまけにそこには、馬蠅が一匹、わたしの足音も聞えないように、べったり食いついて居りましたっけ。

太刀か何かは見えなかったか？　いえ、何もございません。ただその側の杉の根がたに、縄が一筋落ちて居りました。それから、――そうそう、縄のほかにも櫛が一つございました。死骸のまわりにあったものは、この二つぎりでございます。が、草や竹の落葉は、一面に踏み荒されて居りましたから、きっとあの男は殺される前に、よほど手痛い働きでも致したのに違いございません。何、馬はいなかったか？　あそこは一体馬なぞには、はいれない所でございます。何しろ馬の通う路とは、藪一つ隔たって居りますから。

検非違使に問われたる旅法師の物語

あの死骸の男には、確かに昨日遇って居ります。昨日の、――さあ、午頃でございましょう。場所は関山から山科へ、参ろうと云う途中でございます。あの男は馬に乗った女と一しょに、関山の方へ歩いて参りました。女は牟子を垂れて居りましたから、顔はわたしにはわかりません。見えたのはただ萩重ねらしい、衣の色ばかりでございます。馬は月毛の、――確か法師髪の馬のようでございました。丈でございますか？　丈は四寸もございましたか？　――何しろ沙門の事でございますから、その辺ははっきり存じません。男は、――いえ、太刀も帯びて居れば、弓矢も携えて居りました。殊に黒い塗り箙へ、二十あまり征矢をさしたのは、ただ今でもはっきり覚えて居ります。

あの男がかようになろうとは、夢にも思わずに居りましたが、真に人間の命なぞは、如露亦如電に違いございません。やれやれ、何とも申しようのない、気の毒な事を致しました。

検非違使に問われたる放免の物語

わたしが搦め取った男でございますか？　これは確かに多襄丸と云う、名高い盗人でございます。もっともわたしが搦め取った時には、馬から落ちたのでございましょう、粟田口の石橋の上に、うんうん呻って居りました。時刻でございますか？　時刻は昨夜の初更頃でございます。いつぞやわたしが捉え損じた時にも、やはりこの紺の水干に、打出しの太刀を佩いて居りました。ただ今はそのほかにも御覧の通り、弓矢の類さえ携えて居ります。さようでございますか？　あの死骸の男が持っていたのも、――では人殺しを働いたのは、この多襄丸に違いございません。革を巻いた弓、黒塗りの箙、鷹の羽の征矢が十七本、――これは皆、あの男が持っていたものでございましょう。はい。馬もおっしゃる通り、法師髪の月毛でございます。その畜生に落されるとは、何かの因縁に違いございません。それは石橋の少し先に、長い端綱を引いたまま、路ばたの青芒を食って居りました。

この多襄丸と云うやつは、洛中に徘徊する盗人の中でも、女好きのやつでございます。昨年の秋鳥部寺の賓頭盧の後の山に、物詣でに来たらしい女房が一人、女の童と一しょに殺されていたのは、こいつの仕業だとか申して居りました。その月毛に乗っていた女も、こいつがあの男を殺したとなれば、どこへどうしたかわかりません。差出がましゅうございますが、それも御詮議下さいまし。

検非違使に問われたる媼の物語

はい、あの死骸は手前の娘が、片附いた男でございます。が、都のものではございません。若狭の国府の侍でございます。名は金沢の武弘、年は二十六歳でございました。いえ、優しい気立でございますから、遺恨なぞ受ける筈はございません。

娘でございますか？　娘の名は真砂、年は十九歳でございます。これは男にも劣らぬくらい、勝気の女でございますが、まだ一度も武弘のほかには、男を持った事はございません。顔は色の浅黒い、左の眼尻に黒子のある、小さい瓜実顔でございます。

武弘は昨日娘と一しょに、若狭へ立ったのでございますが、こんな事になりますとは、何と云う因果でございましょう。しかし娘はどうなりましたやら、壻の事はあきらめましても、これだけは心配でなりません。どうかこの姥が一生のお願いでございますから、たとい草木を分けましても、娘の行方をお尋ね下さいまし。何に致せ憎いのは、その多襄丸とか何とか申す、盗人のやつでございます。壻ばかりか、娘までも………（跡は泣き入りて言葉なし）

　　　　　　×　　　　　　　　　　×　　　　　　　　　　×

多襄丸の白状

あの男を殺したのはわたしです。しかし女は殺しはしません。ではどこへ行ったのか？　それはわたしにもわからないのです。まあ、お待ちなさい。いくら拷問にかけられても、知らない事は申されますまい。その上わたしもこうなれば、卑怯な隠し立てはしないつもりです。

わたしは昨日の午少し過ぎ、あの夫婦に出会いました。その時風の吹いた拍子に、牟子の垂絹が上ったものですから、ちらりと女の顔が見えたのです。ちらりと、――見えたと思う瞬間には、もう見えなくなったのですが、一つにはそのためもあったのでしょう、わたしにはあの女の顔が、女菩薩のように見えたのです。わたしはその咄嗟の間に、たとい男は殺しても、女は奪おうと決心しました。

何、男を殺すなぞは、あなた方の思っているように、大した事ではありません。どうせ女を奪うとなれば、必ず、男は殺されるのです。ただわたしは殺す時に、腰の太刀を使うのですが、あなた方は太刀は使わない、ただ権力で殺す、金で殺す、どうかするとおためごかしの言葉だけでも殺すでしょう。なるほど血は流れない、男は立派に生きている、――しかしそれでも殺したのです。罪の深さを考えて見れば、あなた方が悪いか、わたしが悪いか、どちらが悪いかわかりません。（皮肉なる微笑）

しかし男を殺さずとも、女を奪う事が出来れば、別に不足はない訳です。いや、その時の心もちでは、出来るだけ男を殺さずに、女を奪おうと決心したのです。が、あの山科の駅路では、とてもそんな事は出来ません。そこでわたしは山の中へ、あの夫婦をつれこむ工夫をしました。

これも造作はありません。わたしはあの夫婦と途づれになると、向うの山には古塚がある、この古塚を発いて見たら、鏡や太刀が沢山出た、わたしは誰も知らないように、山の陰の藪の中へ、そう云う物を埋めてある、もし望み手があるならば、どれでも安い値に売り渡したい、――と云う話をしたのです。男はいつかわたしの話に、だんだん心を動かし始めました。それから、――どうです。欲と云うものは恐しいではありませんか？　それから半時もたたない内に、あの夫婦はわたしと一しょに、山路へ馬を向けていたのです。

わたしは藪の前へ来ると、宝はこの中に埋めてある、見に来てくれと云いました。男は欲に渇いていますから、異存のある筈はありません。が、女は馬も下りずに、待っていると云うのです。またあの藪の茂っているのを見ては、そう云うのも無理はありますまい。わたしはこれも実を云えば、思う壺にはまったのですから、女一人を残したまま、男と藪の中へはいりました。

藪はしばらくの間は竹ばかりです。が、半町ほど行った処に、やや開いた杉むらがある、――わたしの仕事を仕遂げるのには、これほど都合の好い場所はありません。わたしは藪を押し分けながら、宝は杉の下に埋めてあると、もっともらしい嘘をつきました。男はわたしにそう云われると、もう痩せ杉が透いて見える方へ、一生懸命に進んで行きます。その内に竹が疎らになると、何本も杉が並んでいる、――わたしはそこへ来るが早いか、いきなり相手を組み伏せました。男も太刀を佩いているだけに、力は相当にあったようですが、不意を打たれてはたまりません。たちまち一本の杉の根がたへ、括りつけられてしまいました。縄ですか？　縄は盗人の有難さに、いつ塀を越えるかわかりませんから、ちゃんと腰につけていたのです。勿論声を出させないためにも、竹の落葉を頬張らせれば、ほかに面倒はありません。

わたしは男を片附けてしまうと、今度はまた女の所へ、男が急病を起したらしいから、見に来てくれと云いに行きました。これも図星に当ったのは、申し上げるまでもありますまい。女は市女笠を脱いだまま、わたしに手をとられながら、藪の奥へはいって来ました。ところがそこへ来て見ると、男は杉の根に縛られている、――女はそれを一目見るなり、いつのまに懐から出していたか、きらりと小刀を引き抜きました。わたしはまだ今までに、あのくらい気性の烈しい女は、一人も見た事がありません。もしその時でも油断していたらば、一突きに脾腹を突かれたでしょう。いや、それは身を躱したところが、無二無三に斬り立てられる内には、どんな怪我も仕兼ねなかったのです。が、わたしも多襄丸ですから、どうにかこうにか太刀も抜かずに、とうとう小刀を打ち落しました。いくら気の勝った女でも、得物がなければ仕方がありません。わたしはとうとう思い通り、男の命は取らずとも、女を手に入れる事は出来たのです。

男の命は取らずとも、――そうです。わたしはその上にも、男を殺すつもりはなかったのです。所が泣き伏した女を後に、藪の外へ逃げようとすると、女は突然わたしの腕へ、気違いのように縋りつきました。しかも切れ切れに叫ぶのを聞けば、あなたが死ぬか夫が死ぬか、どちらか一人死んでくれ、二人の男に恥を見せるのは、死ぬよりもつらいと云うのです。いや、その内どちらにしろ、生き残った男につれ添いたい、――そうも喘ぎ喘ぎ云うのです。わたしはその時猛然と、男を殺したい気になりました。（陰鬱なる興奮）

こんな事を申し上げると、きっとわたしはあなた方より残酷な人間に見えるでしょう。しかしそれはあなた方が、あの女の顔を見ないからです。殊にその一瞬間の、燃えるような瞳を見ないからです。わたしは女と眼を合せた時、たとい神鳴に打ち殺されても、この女を妻にしたいと思いました。妻にしたい、――わたしの念頭にあったのは、ただこう云う一事だけです。これはあなた方の思うように、卑しい色欲ではありません。もしその時色欲のほかに、何も望みがなかったとすれば、わたしは女を蹴倒しても、きっと逃げてしまったでしょう。男もそうすればわたしの太刀に、血を塗る事にはならなかったのです。が、薄暗い藪の中に、じっと女の顔を見た刹那、わたしは男を殺さない限り、ここは去るまいと覚悟しました。

しかし男を殺すにしても、卑怯な殺し方はしたくありません。わたしは男の縄を解いた上、太刀打ちをしろと云いました。（杉の根がたに落ちていたのは、その時捨て忘れた縄なのです。）男は血相を変えたまま、太い太刀を引き抜きました。と思うと口も利かずに、憤然とわたしへ飛びかかりました。――その太刀打ちがどうなったかは、申し上げるまでもありますまい。わたしの太刀は二十三合目に、相手の胸を貫きました。二十三合目に、――どうかそれを忘れずに下さい。わたしは今でもこの事だけは、感心だと思っているのです。わたしと二十合斬り結んだものは、天下にあの男一人だけですから。（快活なる微笑）

わたしは男が倒れると同時に、血に染まった刀を下げたなり、女の方を振り返りました。すると、――どうです、あの女はどこにもいないではありませんか？　わたしは女がどちらへ逃げたか、杉むらの間を探して見ました。が、竹の落葉の上には、それらしい跡も残っていません。また耳を澄ませて見ても、聞えるのはただ男の喉に、断末魔の音がするだけです。

事によるとあの女は、わたしが太刀打を始めるが早いか、人の助けでも呼ぶために、藪をくぐって逃げたのかも知れない。――わたしはそう考えると、今度はわたしの命ですから、太刀や弓矢を奪ったなり、すぐにまたもとの山路へ出ました。そこにはまだ女の馬が、静かに草を食っています。その後の事は申し上げるだけ、無用の口数に過ぎますまい。ただ、都へはいる前に、太刀だけはもう手放していました。――わたしの白状はこれだけです。どうせ一度は樗の梢に、懸ける首と思っていますから、どうか極刑に遇わせて下さい。（昂然たる態度）

清水寺に来れる女の懺悔

――その紺の水干を着た男は、わたしを手ごめにしてしまうと、縛られた夫を眺めながら、嘲るように笑いました。夫はどんなに無念だったでしょう。が、いくら身悶えをしても、体中にかかった縄目は、一層ひしひしと食い入るだけです。わたしは思わず夫の側へ、転ぶように走り寄りました。いえ、走り寄ろうとしたのです。しかし男は咄嗟の間に、わたしをそこへ蹴倒しました。ちょうどその途端です。わたしは夫の眼の中に、何とも云いようのない輝きが、宿っているのを覚りました。何とも云いようのない、――わたしはあの眼を思い出すと、今でも身震いが出ずにはいられません。口さえ一言も利けない夫は、その刹那の眼の中に、一切の心を伝えたのです。しかしそこに閃いていたのは、怒りでもなければ悲しみでもない、――ただわたしを蔑んだ、冷たい光だったではありませんか？　わたしは男に蹴られたよりも、その眼の色に打たれたように、我知らず何か叫んだぎり、とうとう気を失ってしまいました。

その内にやっと気がついて見ると、あの紺の水干の男は、もうどこかへ行っていました。跡にはただ杉の根がたに、夫が縛られているだけです。わたしは竹の落葉の上に、やっと体を起したなり、夫の顔を見守りました。が、夫の眼の色は、少しもさっきと変りません。やはり冷たい蔑みの底に、憎しみの色を見せているのです。恥しさ、悲しさ、腹立たしさ、――その時のわたしの心の中は、何と云えば好いかわかりません。わたしはよろよろ立ち上りながら、夫の側へ近寄りました。

「あなた。もうこうなった上は、あなたと御一しょには居られません。わたしは一思いに死ぬ覚悟です。しかし、――しかしあなたもお死になすって下さい。あなたはわたしの恥を御覧になりました。わたしはこのままあなた一人、お残し申す訳には参りません。」

わたしは一生懸命に、これだけの事を云いました。それでも夫は忌わしそうに、わたしを見つめているばかりなのです。わたしは裂けそうな胸を抑えながら、夫の太刀を探しました。が、あの盗人に奪われたのでしょう、太刀は勿論弓矢さえも、藪の中には見当りません。しかし幸い小刀だけは、わたしの足もとに落ちているのです。わたしはその小刀を振り上げると、もう一度夫にこう云いました。

「ではお命を頂かせて下さい。わたしもすぐにお供します。」

夫はこの言葉を聞いた時、やっと唇を動かしました。勿論口には笹の落葉が、一ぱいにつまっていますから、声は少しも聞えません。が、わたしはそれを見ると、たちまちその言葉を覚りました。夫はわたしを蔑んだまま、「殺せ。」と一言云ったのです。わたしはほとんど、夢うつつの内に、夫の縹の水干の胸へ、ずぶりと小刀を刺し通しました。

わたしはまたこの時も、気を失ってしまったのでしょう。やっとあたりを見まわした時には、夫はもう縛られたまま、とうに息が絶えていました。その蒼ざめた顔の上には、竹に交った杉むらの空から、西日が一すじ落ちているのです。わたしは泣き声を呑みながら、死骸の縄を解き捨てました。そうして、――そうしてわたしがどうなったか？　それだけはもうわたしには、申し上げる力もありません。とにかくわたしはどうしても、死に切る力がなかったのです。小刀を喉に突き立てたり、山の裾の池へ身を投げたり、いろいろな事もして見ましたが、死に切れずにこうしている限り、これも自慢にはなりますまい。（寂しき微笑）わたしのように腑甲斐ないものは、大慈大悲の観世音菩薩も、お見放しなすったものかも知れません。しかし夫を殺したわたしは、盗人の手ごめに遇ったわたしは、一体どうすれば好いのでしょう？　一体わたしは、――わたしは、――（突然烈しき歔欷）

巫女の口を借りたる死霊の物語

――盗人は妻を手ごめにすると、そこへ腰を下したまま、いろいろ妻を慰め出した。おれは勿論口は利けない。体も杉の根に縛られている。が、おれはその間に、何度も妻へ目くばせをした。この男の云う事を真に受けるな、何を云っても嘘と思え、――おれはそんな意味を伝えたいと思った。しかし妻は悄然と笹の落葉に坐ったなり、じっと膝へ目をやっている。それがどうも盗人の言葉に、聞き入っているように見えるではないか？　おれは妬しさに身悶えをした。が、盗人はそれからそれへと、巧妙に話を進めている。一度でも肌身を汚したとなれば、夫との仲も折り合うまい。そんな夫に連れ添っているより、自分の妻になる気はないか？　自分はいとしいと思えばこそ、大それた真似も働いたのだ、――盗人はとうとう大胆にも、そう云う話さえ持ち出した。

盗人にこう云われると、妻はうっとりと顔を擡げた。おれはまだあの時ほど、美しい妻を見た事がない。しかしその美しい妻は、現在縛られたおれを前に、何と盗人に返事をしたか？　おれは中有に迷っていても、妻の返事を思い出すごとに、嗔恚に燃えなかったためしはない。妻は確かにこう云った、――「ではどこへでもつれて行って下さい。」（長き沈黙）

妻の罪はそれだけではない。それだけならばこの闇の中に、いまほどおれも苦しみはしまい。しかし妻は夢のように、盗人に手をとられながら、藪の外へ行こうとすると、たちまち顔色を失ったなり、杉の根のおれを指さした。「あの人を殺して下さい。わたしはあの人が生きていては、あなたと一しょにはいられません。」――妻は気が狂ったように、何度もこう叫び立てた。「あの人を殺して下さい。」――この言葉は嵐のように、今でも遠い闇の底へ、まっ逆様におれを吹き落そうとする。一度でもこのくらい憎むべき言葉が、人間の口を出た事があろうか？　一度でもこのくらい呪わしい言葉が、人間の耳に触れた事があろうか？　一度でもこのくらい、――（突然迸るごとき嘲笑）その言葉を聞いた時は、盗人さえ色を失ってしまった。「あの人を殺して下さい。」――妻はそう叫びながら、盗人の腕に縋っている。盗人はじっと妻を見たまま、殺すとも殺さぬとも返事をしない。――と思うか思わない内に、妻は竹の落葉の上へ、ただ一蹴りに蹴倒された、（再び迸るごとき嘲笑）盗人は静かに両腕を組むと、おれの姿へ眼をやった。「あの女はどうするつもりだ？　殺すか、それとも助けてやるか？　返事はただ頷けば好い。殺すか？」――おれはこの言葉だけでも、盗人の罪は赦してやりたい。（再び、長き沈黙）

妻はおれがためらう内に、何か一声叫ぶが早いか、たちまち藪の奥へ走り出した。盗人も咄嗟に飛びかかったが、これは袖さえ捉えなかったらしい。おれはただ幻のように、そう云う景色を眺めていた。

盗人は妻が逃げ去った後、太刀や弓矢を取り上げると、一箇所だけおれの縄を切った。「今度はおれの身の上だ。」――おれは盗人が藪の外へ、姿を隠してしまう時に、こう呟いたのを覚えている。その跡はどこも静かだった。いや、まだ誰かの泣く声がする。おれは縄を解きながら、じっと耳を澄ませて見た。が、その声も気がついて見れば、おれ自身の泣いている声だったではないか？　（三度、長き沈黙）

おれはやっと杉の根から、疲れ果てた体を起した。おれの前には妻が落した、小刀が一つ光っている。おれはそれを手にとると、一突きにおれの胸へ刺した。何か腥い塊がおれの口へこみ上げて来る。が、苦しみは少しもない。ただ胸が冷たくなると、一層あたりがしんとしてしまった。ああ、何と云う静かさだろう。この山陰の藪の空には、小鳥一羽囀りに来ない。ただ杉や竹の杪に、寂しい日影が漂っている。日影が、――それも次第に薄れて来る。――もう杉や竹も見えない。おれはそこに倒れたまま、深い静かさに包まれている。

その時誰か忍び足に、おれの側へ来たものがある。おれはそちらを見ようとした。が、おれのまわりには、いつか薄闇が立ちこめている。誰か、――その誰かは見えない手に、そっと胸の小刀を抜いた。同時におれの口の中には、もう一度血潮が溢れて来る。おれはそれぎり永久に、中有の闇へ沈んでしまった。………

<次のページに続く>

練習2 アウトラインモード

下記に掲載した文章は、長文編集についての原稿です。

「アウトラインモード」を使って、以下のルールで見出しを設定しましょう。

* 「■」がついている見出しをレベル1（見出し1）に
* 「●」が付いている見出しをレベル2（見出し2）に
* 「○」が付いている見出しをレベル3（見出し3）に

たとえば、「長文の編集」という文字が「見出し1」、「スタイルの設定」が「見出し ２」、「スタイルとは」という文字が「見出し 3」という具合です。  
見出しになる行は上下に余白があるので目印になると思います。  
  
 **■長文の編集 ←レベル1 (見出し1)  
 ●スタイルの設定 ←レベル2 (見出し2)**  
 ○スタイルとは ←レベル3 (見出し3)  
 ○スタイルの設定画面を開く  
 ○二種類のスタイル（段落スタイル ＆ 文字スタイル）  
 ○現在のスタイルを確認する  
 ○スタイルを適用する  
 ○スタイルの内容を変える  
 ○スタイルを別の場所にも適用する  
 ○新しいスタイルの追加  
 ○章番号を追加する  
 ○参考：多階層の章番号を振る  
 **●ページ番号**  
 ○ページ番号の挿入  
 ○ヘッダーとフッターとは  
 ○ヘッダーとフッターの編集  
 **●目次の挿入**  
 ○目次の更新  
 **●アウトラインモード**  
 ○アウトラインモードとは  
 ○アウトラインモードへの切り替え  
 ○アウトラインモードでの画面表示  
 ○レベルとは  
 ○アウトラインモードでの操作  
 ○ショートカットキーによるアウトラインモードの操作

「アウトラインモード」を使って章のレベルを操作したり、順番を入れ替えたり、自由に編集してみてください。（多少、文章の構成が崩れたり、章のレベル設定が間違っていたりしてもかまいません。自由に試してみましょう😊）  
最終的に何らかのレベル（見出し）設定ができていれば良いものとします。

■長文の編集

●スタイルの設定

○スタイルとは

スタイルは、フォント設定、色、行間隔、段落位置などの書式設定をセットにして保存したものです。スタイルを使いこなすことで、長文においても統一感のあるデザインを施すことができます。

○スタイルの設定画面を開く

現在のスタイルを確認したり、スタイルの変更や削除等を行ったりするには、スタイルウインドウを開くと便利です。

スタイルウインドウは、画面上部「スタイル」欄のオプションボタン を押すことで開けます。

「標準」「見出し1」「見出し2」といったスタイルが、初期状態で定義されていることがわかります。

○二種類のスタイル（段落スタイル ＆ 文字スタイル）

スタイルには主に二つの種類があり、[ ]マークがついている[段落スタイル]と、[ ]マークがついている[文字スタイル]があります。

段落スタイル と 文字スタイル の違いは、前者は段落全体にデザインが適用され、後者は１文字単位でデザインが適用される、という点です。またインデント(字下げ)など一部の書式は、段落スタイルにしか効果が適用されません。

○現在のスタイルを確認する

カーソルを文章の上に置いている時、スタイルウインドウ中のどれかに青い枠がつきます。この枠がついているのが、カーソル位置の文字に設定されているスタイルです。(初期状態では、おそらく「標準」になっているはずです)

○スタイルを適用する

例として、文章のタイトルである「藪の中」と言う文字に「見出し１」スタイルを以下の手順で適用してみましょう。

1. 練習問題の文頭にある「藪の中」の文字を選択する。

2. スタイルウインドウ内の「見出し１」スタイルをクリックする。

これで、選択した部分に指定のスタイルが適用されました。簡単ですね。もしスタイルを元に戻したい場合は、同様の操作で「標準」を適用しましょう。

○スタイルの内容を変える

スタイルの内容を変更したい場合は、主に二種類の方法があります。各スタイルを[右クリック]→[変更]し、設定パネルを開いて細かく編集する方法と、好きな書式設定を実際に行ってから、その結果をスタイルに登録する方法の二つです。

例として、後者の方法で見出しのデザインを変更してみます。以下の手順で操作してみましょう。

1. 見出しとなる「検非違使に問われたる木樵りの物語」の部分を選択し、フォントや文字の大きさ、色などを自由に設定する。

2. 選択範囲が残っている状態で、スタイルウインドウ内の「見出し２」を[右クリック]し、[選択箇所と一致するように 見出し２ を更新する]をクリックする。

これで「見出し２」のデザインは、選択範囲のものと同じ書式に変更されました。さらに選択部分「検非違使に問われたる木樵りの物語」には、「見出し２」スタイルが自動的に適用されます。

○スタイルを別の場所にも適用する

設定を変更した「見出し２」スタイルを、別の場所にも適用してみましょう。

「藪の中」の文章中には、見出しとなる箇所が、合計7箇所あります。

「検非違使に問われたる旅法師の物語」「検非違使に問われたる放免の物語」「検非違使に問われたる媼の物語」のような部分を選択し、スタイルウインドウ内の「見出し２」をクリックすると、先程設定したデザインに変更される様子が確認できます。

これで、同じデザインを繰り返し設定するのが簡単になります。各章のタイトルを「見出し２」に設定してみましょう。

○新しいスタイルの追加

新規スタイルを追加することもできます。スタイルの情報はWORDファイル内の特別な領域に保存されます。

例えば、文字に赤い色をつけるための文字スタイル「赤文字」を、以下のような手順で追加してみましょう。

1. 本文中の好きな部分をいくつか選択し、フォントの色を赤色、太文字に設定します。

2. スタイルウインドウ下部にある、 [新しいスタイル]ボタンをクリックします。スタイル登録用の設定画面が開きます。

A) [名前]欄には好きなスタイル名を記入します。たとえば「赤文字」などです。

B) [種類]欄を「文字」に設定すると、文字スタイルとして登録され、1文字単位でデザインを適用できるようになります。今回は「文字」に設定します。

C) [スタイルギャラリーに追加]チェックをONにしておくと、WORD画面上部のスタイル一覧(スタイルギャラリー)に設定したスタイルが掲載されるようになります。好みで設定してください。

D) [OK]をクリックすると、登録完了です。

これで「赤文字」という名前の新しいスタイルが登録されました。好きな文字を選択し、「赤文字」スタイルをクリックすれば、文字のデザインが変わるはずです。自由にいくつかの場所を「赤文字」スタイルに設定してみましょう。

○章番号を追加する

例えば「1 はじめに」「1．1 このレポートの概要」のように、各章の見出しに番号を振りたい場合があるかもしれません。

以下のように操作して、章番号を振ってみましょう。

1. 冒頭の「藪の中」と書かれた行に「見出し１」スタイルが適用されていることを確認する。

見出し１～３スタイルは、特殊なスタイルです。WORDは、見出しスタイルを設定した場所を、章の変わり目として認識します。

2. カーソルが「藪の中」(見出し1)の行にある状態にする。

3. [アウトライン]ボタンの右にある▼ボタンを押し、好きな番号のスタイルを選ぶ。

4. スタイルウインドウ内の「見出し１」を[右クリック]し、[選択箇所と一致するように 見出し１ を更新する]をクリックする。

これで、見出し１スタイルが設定された箇所に、自動的に章番号が振られます。

○参考：多階層の章番号を振る

もし1.1　1.2　1.3　2.1　2.2...のように、章番号に階層構造を作りたい場合は、以下のように設定しましょう。

1. 見出し1と見出し2が文章中に設定されていることを確認する。

2. [アウトライン]ボタンの右にある▼ボタンを押し、[新しいアウトラインの定義]を選択する。

3. 設定画面左上の「1」をクリックし [レベルと対応付ける見出しスタイル] 欄を [見出し1] に設定する。

4. 同様に「2」をクリックし [レベルと対応付ける見出しスタイル] 欄を [見出し2] に設定する。 以降も必要に応じて「3」等を設定して[OK] ボタンを押し、設定を完了する。

このように設定すると、各見出しの関係性をWORDが判断できるようになり、「見出し1」や「見出し2」スタイルを文章に設定するたびに、自動的に章番号が振られるようになります。

●ページ番号

各ページにページ番号を振っておくと、ページの順序が分かりやすくなります。ですが手動で各ページに番号を入力するのは面倒ですので、自動的にページ番号を振る方法を紹介します。

○ページ番号の挿入

ページ番号は簡単に挿入できます。以下のような操作でページ番号を挿入してみましょう。

 [挿入]→[ページ番号]→[ページの下部] をクリックし、一覧の中から好きなデザインを選択する。

これで、すべてのページに自動的に番号が入力されます。

なお、ページ番号の挿入直後は、[ヘッダー・フッター編集モード]と呼ばれる特殊な画面モードになっていて、通常の文章編集ができません。 ページ番号を挿入し終わったら、右上にある[× ヘッダーとフッターを閉じる]ボタンを押すか、キーボードの「ESC」キーを押して、通常の画面に戻ってください。

○ヘッダーとフッターとは

ページの最上部、または最下部に存在する入力欄がヘッダーとフッターです。上部がヘッダーで、下部がフッターです。

ヘッダーやフッターには、ページ番号の他にも、自由な文章を入力したり、図形を挿入したりできます。 ここに入力した文章や挿入した図形は、全てのページに繰り返し表示されるのが特徴です。

○ヘッダーとフッターの編集

ヘッダーやフッターの内容を編集したい場合は、[挿入]→[ヘッダー]→[ヘッダーの編集] や [挿入]→[フッター]→[フッターの編集] で、専用の「ヘッダー・フッター編集画面」に入って編集します。

※ 文章の上下の余白部分をダブルクリックして、直接ヘッダー・フッター編集画面に入ることもできます。

ヘッダー・フッター編集中は、本文の編集は一切行えません。本文の編集に戻りたい場合は、右上にある[× ヘッダーとフッターを閉じる]ボタンを押すか、キーボードのESCキーを押して通常の画面に戻りましょう。

●目次の挿入

文章中に「見出し」スタイルが設定してあるならば、WORDは見出しを元に正確な目次を作ることができます。以下の操作で目次を挿入してみましょう。

1. 目次を挿入する位置をクリック。ここでは１ページ目の先頭をクリックです。

2. [参考資料]→[目次]を選択し、好きなデザインの目次を選ぶ。

文章内の「見出し」を認識して目次を生成するので、目次を作る前に、あらかじめ「見出し」スタイルを設定しておきましょう。

○目次の更新

文章を編集すると、全体の長さが変わったり、新しい見出しが追加されたりします。

そのような場合は、[参考資料]→[目次の更新] を行うと、目次内の見出しやページ番号などが最新の情報に更新されます。目次を作り直さなくて良いので便利です。

●アウトラインモード

○アウトラインモードとは

アウトラインモードは、WORDの画面モードの一つで、「見出し」を重視して、文章の構造を編集するのに適したモードです。

論文やレポート、説明書、小説など、特に全体の流れや構成が重要な長文を編集する際に役に立ちます。

○アウトラインモードへの切り替え

画面をアウトラインモードに切り替えるには、以下の操作を行います。

 [表示]→[アウトライン]

元の画面に戻りたい場合は、以下の操作でいつでも戻れます。

 [表示]→[印刷レイアウト]

(または[アウトライン]→[× アウトライン表示を閉じる]ボタン)

○アウトラインモードでの画面表示

アウトラインモードでは、図などの表示は省略され、単純なテキストのみの画面で表示されます。また、各段落の先頭にマークがつきます。

「○+」マークが付いている行は、見出しとして設定されていることを意味しています。

「○」マークが付いている行は、本文における各段落の先頭を意味しています。

○レベルとは

アウトラインモードでは、各段落が「見出し」であるか、それとも「本文」(標準スタイル)であるかをレベルという考え方で設定します。

レベルには「レベル1」～「レベル9」と、最下位レベルに当たる「本文」の、合計10レベルがあります。

レベル1～9は「見出し1」～「見出し9」スタイルに対応しています。

例えば、アウトラインモードで「レベル1」に設定すると、「見出し1」スタイルが適用されたのと同じ意味になります。

○アウトラインモードでの操作

アウトラインモードでは、以下のような操作が行なえます。

 移動：行頭に付いている○マークや○+マークを一度クリックし、上下にドラッグすれば、文章の順番を入れ替えられます。 (なお、画面上部のアウトラインメニューにある▲▼ボタンでも同様に移動が行えます)

 折りたたみ：見出しの行頭に付いている○+マークをダブルクリックすると、各章の内容を折りたたんで省略表示します。

(なお、アウトラインメニューにある＋－ボタンでも同様に省略表示を切り替えられます)

 レベル変更：アウトラインメニューにある ボタンで、レベル(見出し)を設定できます。

ボタンを押すと必ず「見出し1」になり、 ボタンを押すと必ず「本文」(標準スタイル)になります。

ボタンを押すと見出しのレベルを一つ上げ、 ボタンを押すと一つ下げられます。

レベルを一つ下げるごとに、文章の位置が右方向にずれて表示されます。

アウトラインモードは、レポートや説明書、アイデアノート、やることリストなど、全体の構成が大切な長文を整理するのに役立ちます。ぜひ使ってみてください。

○ショートカットキーによるアウトラインモードの操作

ショートカットキーを使ってアウトラインモードを操作できるようになると、作業効率が格段に向上します！

アウトラインモードを使いこなしたい場合は、参考にしてください。

|  |  |
| --- | --- |
| 操作 | ショートカットキー |
| レベルをひとつ下げる | [Alt] + [Shift] + [→] (または [Tab] ) |
| レベルをひとつ上げる | [Alt] + [Shift] + [←] (または [Shift] + [Tab] ) |
| 「本文」レベルにする | [Ctrl] + [Shift] + [N] |
| 指定のレベルまで画面に表示する |  |
| (指定レベル以下をすべて折りたたむ) | [Alt] + [Shift] + [1]～[9] |
| 全てのレベルを表示する |  |
| (折り畳まれているものをすべて表示する) | [Alt] + [Shift] + [A] |
| 選択した文章を前後に移動させる | [Alt] + [Shift] + [↑][↓] |
| 見出しに所属する本文を展開・折りたたみする | [Alt] + [Shift] + [＋][－] |

※覚え方としては、「『本文レベルにする』以外のほとんどのショートカットが[Alt]+[Shift]で行える」と覚えると良いでしょう。

以下の操作で画面モードを切り替えることもできます。

|  |  |
| --- | --- |
| 操作 | ショートカットキー |
| アウトラインモードに切り替える | [Ctrl] + [Alt] + [O] |
| 通常の画面モード(印刷レイアウト)に切り替える | [Ctrl] + [Alt] + [P] |